UDC 043.5

所長に就任するに当たって

菊　池　真　一

菊 池 所 長

今回皆様のご推挙によって生研第 8 代目の所長になりました．教職員の皆様のご協力によって任務を果したいと考えていますのでよろしくお願いいたします．

生研が発足して以来すでに 18 年を経過しました．若い教職員の方のうちには生研発足当時のことをご存じのない方も多いと思いますので簡単に何を目的に生研がつくられたかお話しして見ましょう．昭和16年第二次大戦に日本が巻き込まれる直前，当時の日本の状勢から工業技術者を大量に必要とするところから東京大学の工学部を倍加し，第二工学部を置き，その教官と学生の質を両学部において可及的に等しくするという原理でつくられることになったもので，昭和 17 年 4 月から開設されました．当時は国家総力戦の最中でもあって物質不足のおりからにもかかわらず，さいわい陸海軍の援助もあったが，教官，学生相携えて工学教育と研究に涙ぐましい努力を払いました．当時の学生諸君はいま日本工業界の各方面で文字どおり中堅の，または最高の幹部として活躍しておられます．

不幸にして敗戦となり，占領下において日本の制度は大変革にあい，とくに戦時中にできた制度はご破算にするという原理が通用したときであったので東京大学の第二工学部は廃止されることになり，8 回の卒業生を出して使命を終わりました．しかし立派な教官と職員はこれを分散するにしのびないので東京大学に当時設置された新制度準備委員会において研究の結果，生産技術研究所が昭和 24 年 5 月 31 日に東京大学の附置研の一つとして誕生しました（これらの経過は生産研究第 11 巻第 6 号 136 ページ〔昭和 34 年〕に書いてあります）．当時東京大学には理工学研究所（現在の宇宙航空研の前身）があり，その名の示すごとく理工学の研究にたずさわる性質の研究所であるので，生産技術研究所が新しく担当する分野とこの理工学研究所の分野がはなはだ明確を欠いていました．しかし初代，3 代の第 2 工学部長であり，初代生産技術研究所長であった瀬藤象二先生は生研と理工研をスペクトルにたとえ，生研と理工研の研究分野のスペクトルは重なっている所もあるが，生研の方はその名の示すごとくより工学と生産技術の方へかたよっていてよいと説明されました．現在東京大学要覧の生産技術研究所のところを開くと，「生産に関する技術的問題の科学的総合研究ならびに研究成果の実用化試験をつかさどる」のを目的とするようになっています．

第 2 工学部開設当時 62 講座あったものが 35 講座相当に減らされ，教官，職員ともに非常に苦労をしたが，皆一生懸命努力したために 18 年後の今日どうにか立派な成績をあげて世の中にみとめられるようになったのはご同慶の至りです．この研究所の特徴とするところは，1) 学部から転化したので各種の専門家がいて，その人達の協力によって大きい研究をなしうること，ロケット，溶鉱炉，自動車工学など大きい仕事は多くこの例であります．2) 受託研究制度をつくって産学協同につくしている．こういう利点の反面大きい附置研究所は一定の目的がないだけにちょっと皆が油断するとまとまりがなくなる心配があります．

この間第 2 工学部以来千葉市にあった研究所は昭和 37 年までに現在の東京都港区麻布新竜土町に移転を完了し，本郷の東大本部との位置の優位性などから次第に発展し，現在教授，助教授定員各 42 名，講師 10 名となっています．学部学生の教育は前記 8 回の学生に加うるに工学部分校生 1 期を昭和 29 年に送り出してから担当していません．これは研究所に転換が決定した直後からの日本工業の発展を見ると惜しんであまりあることでありますが，幸いその後東京大学の大学院教育を担当し，現在 174 名におよぶ学生を数え，工学教育の方面でもその責任の一端を果しています．

私は少し今までの歴史について紙面をさき過ぎたようですが，こういう経過をもつて発達して来た本研究所が今後一層の発展を遂げるためには教職員の一致した努力によらなければならないということを強調したいと考えるのです．研究の方法についてはできるだけ本所の特徴を生かして各分野の協力態勢によりたい．幸い文部省その他の理解ある援助により他に見られない設備もふえて来たことであるし，これを全面的に活用したいと思います．つぎに工学部より異なる特徴のある研究を心がけたい Grenzgebiete といってもよいでしょう．しかしこういっても地味な基礎的な研究も大いに歓迎してよろしい．

最後に研究は人の和であります．教官も職員も心をそろえて研究にはげんでいただきたい．明るい職場にしたいものであります．ありふれたことですが，ありふれたことを地味に実行するのはまた至難のことです．